

小生は、本機構機関誌第5号の「今昔談義」に「家畜ふん尿処理・利用の手引き」を寄稿された遠崎班長(現在、(社)競走馬育成協会 常務理事)の後任であるから、第3代班長(昭和48年10月～50年10月)と言うことになる。当時、環境保全班は、児玉彰指導官(現在、(社)日本ハンバーガー・ハンバーガー協会専務理事)、藤村忠彦係長(現在、(社)全国牛乳普及協会専務理事)、荒三夫係長の編成であった。後に、前田重太郎さん(現在、自営)が加わった。

環境保全班に配置換えされた頃は、昭和45年公害国会から数年経っていたことであり、国会質問は、質・量において前任班長時代とは全く比べようもないものと言われた。想定問のツルシで間に合う範囲のものであり、答弁の決済に伺った時の角道畜政課長(現在、農林中央金庫理事長)には、「また同じだね。」と言われたことを思い出す。尤も、全てそうであった訳でもないが、種畜牧場生活11年後の本省勤務3年目で、多少の勉強期間があったと言うものの、磨けど甲斐のない才と相俟って小生の答弁の案文は、「これは散文だね。」とあしらわれ、往生したことも併せて思い出す。「家畜ふん尿処理・利用の手引き」が遠崎班長のご苦労によってふん尿処理の指導のためのマニュアルとして作成された後、われわれの代では、「家畜ふん尿処理事例集」を刊行した。都道府県畜産課に依頼して、全国の家畜ふん尿処理の優良事例の収集に努めた。事例は、畜産経営の畜種、飼養頭数規模、労働力構成等の経営の概況をはじめとして、ふん尿処理類型を土壤還元型、水処理型、乾燥型、焼却等に大別した構成をもって紹介した。特に、藤村、荒両係長が詳細に確認をしながら編集した。幾つかについては、現地確認を行った。家畜ふん尿処理としての優良事例は土壤還元型に尽きる訳であるが、畜産経営それぞれの事情・条件を考慮すればいろんな方法がある中で、この方式がベストであると言う趣旨のものではなく、「こうした処理の仕方がありますよ」と畜産公害としない方策の一つの事例の紹介であったと思う。澤辺畜産局長(現在、(財)全国競馬・畜産振興会会長)が「良いものを作っているではないか。」とおっしゃったと後々に知った。

昭和49年は、石油ショックの年である。家畜ふん尿処理については、運搬用ガソリンは元より火力による乾燥、焼却等あってこれに使用する重油等合わせてみると膨大な量であることは推測されるし、現場からの「入手できないから何とかしてくれ」の要請まであって大変な事態に立ち入ったものだとは怖気立った。そのうち官房筋から、全国の畜産経営における家畜ふん尿処理に要する燃料の総需要量を推算すべしとの指示があり「家畜ふん尿処理・利用の手引き」の知識を総動員して作業した。残念ながら、如何なる数量となったのかは、全く記憶にない。ところで、石油ショックは、省エネ・資源活用の意識の覚醒に大変な起爆剤であったことは改めて言うまでもないが、われわれ家畜ふん尿処理対策担当にしてみても、これは千載一遇のチャンスであった。事態が画期的に好転すると言うわけにはいかなかったが、家畜ふん尿処理の機運はそれまでとは大分異なった展開になったと感じたものである。家畜ふん尿の利用の制約が大きいとされていた水田での利用も話題になってきたが、農産園芸局稲作担当者に「ふんと敷き藁の固形物は戴くけど、尿はいらないね」と言われて些かムッカとした。当時、水田地帯における養豚経営について、固液分離すれば特に尿部分について処理方策が課題となることを意識していたので、そうした気分になったことを今でも鮮明に思い出す。

いよいよ、「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」が施行されることになり、担当者はまた特段のご苦労があるものと推察する。一層のご健闘を祈念して終わりとする。